様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３４２

研究課題名（和文）９．１１同時多発テロ以降のパキスタン系英語小説

研究課題名（英文）Post-9/11 Pakistani Fiction in English

研究代表者
板倉　厳一郎（Itakura, Gen'ichiro）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：２０３４０１７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、パキスタン系英語作家の「9.11小説」の主題と表現方法、とりわけ西洋モダニズム文学の影響を明らかにするものである。こういった作家が「西洋対東洋」「西洋対イスラーム」といった図式に収まらない、新しい世界観を提示していることのみならず、西洋のモダニズム以降の文学や思想の影響を受けていることは興味深い。そもそも1930年代以降ウルドゥー語文学にあったコスモポリタニズムに加え、シア＝ウル＝ハク政権下のイスラーム化政策への知識人の反発といった母胎から、西洋文学的手法の受け入れが容易であったと考えられ、英語圏文学の多様性のみならず、英語圏イスラーム世界の多様性を示してもいるだろう。

研究成果の概要（英文）：This research seeks to chart the repertoire of subjects and textual strategies in post-9/11 Pakistani literature in English, especially the influence of Western modernism on this genre. Significantly, English novelists of Pakistani descent not only provide alternative world views, different from the readily accepted narrative of 'the West versus Islam', but also exhibit their inspiration from Western modernist writers and philosophers. The modernist influence can be explained partly by a kind of cosmopolitanism within Pakistani (or Urdu) literature that can be traced back to the 1930s and partly by middle-class intellectuals' dissent against Zia-ul-Haq's Islamisation of the 1970s, the generation of those young writers' parents. This appropriation of Western modernism exemplifies diversity within English-language literature as well as English-speaking Muslims.

研究分野：イギリス文学

キーワード：英語圏文学　9.11同時多発テロ　テロ　トラウマ　モダニズム文学の影響

１．研究開始当初の背景

(1) 研究開始までの状況

本研究は多様化しつつある英語圏世界を俯瞰する意味でも必要であった。パキスタン系作家の新しい英語文学は本邦ではあまり知られていなかった。英米のイギリス文学研究者の間でも、本研究開始前になってようやく注目されはじめたところであった。レハナ・アーメッド他編『イスラーム文学における文化、ディアスポラ、モダニティ』（2012年）、カラ・N・チラーノ編『現代パキスタン英語小説――思想、国民、国家』（2013年）、スティーブン・モートン『非常事態――植民地主義、文化、法』（2013年）などが相次いで出版されていた。

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロは英語圏の政治的言説や文学界に大きな影響を与え、社会に大きな影響を与えたものの、文学への影響は充分に研究されているとは言えなかった。「9.11小説」の研究と言えば、とりわけ本邦においてはほぼアメリカの白人作家の作品のみに関心が集中していた。

ムスリム作家による「9.11小説」は、本邦では紹介が進んでいなかった。モーシン・ハミッドの『気の進まぬ原理主義者』(2007年)、ナディーム・アズラムの『叶えられぬ祈り』（2008 年）および『盲目の男の庭』（2013年)、H・M・ナクヴィの『ホーム・ボーイ』（2009年)、カーミラ・シャムシーの『焦げついた影』（2009 年）などの作品は、「西洋対イスラーム」といった単純な図式を提示することもなければ、「エキゾチック」としてもてはやされた魔術的リアリズムなどの手法を前景化することもなかった。その意味で、アメリカやイギリスの主流（白人中流階級）作家とも、前世代のインド亜大陸出身作家とも異なる潮流を形成していたが、その研究はまだ萌芽段階であった。

(2) 研究開始までの準備状況

板倉は「9.11同時多発テロ以降のイギリス小説」（科学研究費助成金若手研究(B)、課題番号 22720116）において、イギリスにおける「9.11小説」を研究するに至った。その際、イギリスにおいては西洋的な近代性の言説への回帰がその作品を特徴付けており、その原因として新左翼的リベラリズムへの幻滅が広く共有されていたことが考えられることを突き止めた。

一方で、この研究には限界もあった。現代英語圏文学研究という文脈では、欧米では国籍別に学問分野を分けることはせず、学会も同じである。一つの理由には、旧イギリス植民地出身者のディアスポラなどに象徴されるように、英語圏では二重国籍者も多いことが挙げられる。たとえば、モーシン・ハミッドのようにイギリスとパキスタンの二重国籍を持ち、アメリカに活動の拠点を持つ作家もいる。こういった作家は、従来の「イギリス文学」という枠組みでは捉えられなかった。これに加え、英語が国際言語であるために、様々な国籍の作家の影響を持ちうるようになったことも重要である。たとえば南アフリカのムスリム作家イシュティヤク・シュクリのようなローカルな作家の作品が世界中で読まれ、英語圏作家全般に影響を与えるというのが、現在の英語圏文学で起こっている状況である。こういった現状を巨視的に捉えるには、国籍とは別の区分で現代文学の潮流を捉え直す必要性を感じていた。

２．研究の目的

本研究には、9.11同時多発テロ以降、とりわけ 9.11 同時多発テロやその余波そのものを扱ったパキスタン系作家の作品群に見られる傾向と多様性を明らかにすることであった。研究対象とした作品は以下のものであった。

・ モーシン・ハミッド『気の進まぬ原理主義者』（2007年）
・ ナディーム・アズラム『叶えられぬ祈り』（2008年）
・ カーミラ・シャムシー『焦げ付いた影』（2009年）
・ H. M. ナクヴィ『ホーム・ボーイ』（2009年）
・ ナディーム・アズラム『盲目の男の庭』（2013年）

研究開始当初、イギリスにおける「9.11小説」との対照で、以下の二つの目的を想定していた。

⑴ 9.11同時多発テロ以降のパキスタン系英語作家の作品の政治的意義、すなわちパキスタンの英語作家による帝国主義批判の言説が、9.11以降のデリダやバトラーの西洋の自己批判とどのような関係にあるのかを明らかにする

⑵ 9.11同時多発テロ以降のパキスタン系英語作家の作品の美学的特性、すなわち暴力や精神的外傷の表象が同一テーマのイギリス文学作品や他国（他言語）の文学作品とどのように異なっているかを探る

研究が進むにつれ、上記のうち⑵を重視する方向へ研究がシフトしていくことになった。

３．研究の方法

本研究では、「9.11 以降」のパキスタン系作家による英語小説――モーシン・ハミッドの『気の進まぬ原理主義者』、ナディーム・アズラムの『叶えられぬ祈り』および『盲目の男の庭』、H・M・ナクヴィの『ホーム・ボーイ』、カーミラ・シャムシーの『焦げついた影』――を精緻に読解する。

精読に当たり、作品の特性に応じてイギリ

ス作家もしくは他言語のムスリム作家の作品との比較を行う。ハミッドの『気の進まぬ原理主義者』については、明らかに影響を受けたアルベール・カミュの『転落』と合わせて読み、シャムシーの『焦げついた影』については日本の原爆文学――シャムシーが直接的に影響を受けた『はだしのゲン』などのマンガを含む――と比較し、アズラムの作品については英米のモダニズム作品のみならず、ウルドゥー語文学のモダニズムを代表するサアダット・ハサン・マントの作品やフランス語作家アティク・ラヒミらの作品とも比較できる点が多かった。

このような新しい英語文学の研究が盛んなイギリスを中心に、国際学会で積極的に研究発表をおこない、国内外の専門家との連携や意見交換をはかる。

４．研究成果

(1) 研究成果の概要

本研究の成果として、パキスタン系英語作家の「9.11 小説」においては、西洋文学、とりわけモダニズム文学が用いた戦略を換骨奪胎しながら、「西洋対東洋」「西洋対イスラーム」といった図式に収まらない、新しい世界観を新しい表現方法で提示していることがわかった。西洋的な「対テロ戦争」の言説に与することがなかったのは、ジュディス・バトラー等が指摘したようなグローバルな共感の不均衡が影響しているだろう。これは想定の範囲内であったが、研究が進むにつれ、西洋のモダニズム文学の影響のほうが特筆すべき点であることがわかった。そもそも 1930 年代以降ウルドゥー語文学にあったコスモポリタニズムに加え、シア＝ウル＝ハク政権下のイスラーム化政策への知識人の反発といった母胎から、西洋文学的手法の受け入れが容易であったと考えられる。英語圏ムスリムの間でも、パキスタンのウルドゥー語圏（ウルドゥー語母語話者とは限らない）に出自を持つ作家にこういった傾向が見られたのは興味深い。

モダニズムから戦後にかけての西洋文学の影響は顕著である。

モーシン・ハミッドの『気の進まぬ原理主義者』では、単にアルベール・カミュの『転落』をパロディにしているだけではなく、カミュの作品に孕む植民地主義の言説やエリート主義的思想までも受け継いでしまっている。これは主人公／語り手がある程度自覚しているように、パキスタン出身の国外在住知識人層の特徴としても理解できる。

カーミラ・シャムシーの『焦げ付いた影』では、トラウマ表象において西洋哲学や文学の影響が見られる。この作品は一見「グローバル」で、第二次世界大戦中のアメリカ軍による原子爆弾投下と 9.11 同時多発テロを緩やかに結んでいく。これらふたつの事件は、もともとは原子爆弾の爆心地を指し、現在では世界貿易センタービル跡地を指す「グラウンド・ゼロ」という語によって結びつけられているのだが、シャムシーは、「ポストコロニアル文学」に対する世間的なイメージに反して、これらふたつの事件をめぐる対照的な政治的言説を対置させたりはしない。むしろ、彼女はエマニュエル・レヴィナスの他者への倫理的行為の源泉としての「顔」というテーマでこれらを結びつける。レヴィナスの倫理が彼のホロコースト体験と無縁でなかったように、シャムシーの作品もホロコースト文学と合わせ読むことができる。

ナディーム・アズラムも、トラウマ表象においてモダニズム以降の西洋文学や哲学からの影響が顕著である。『叶えられぬ祈り』においては、そのトラウマ表象に映画のモンタージュ理論の文学への転用、モダニズム文学の手法やイメージ使用（たとえば、D. H. ロレンスの『虹』や T. S. エリオットの『荒地』における死と再生のイメージ）が見られる。現代において、西洋言語におけるトラウマ表象がモダニズム文学の影響を避け得ないことから、あえてそういった作品からの影響を拒まず、むしろその意味作用をずらしていくという手法が採られている。文体的には対照的なアティク・ラヒミの『忍従の石』がサンボリストやイマジストの文体に似ていながら、その方向性においては真逆であるのも、よく似た現象として興味深い。また、『盲目の男の庭』においては、9.11 同時多発テロ、アフガニスタン戦争という歴史的文脈において、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンが「例外状態」と呼ぶような状況に置かれた人々（そして動物）を記述し、共感の可能性を探っているように見られる。ここには、現代的な広義の「ポストヒューマン」な関心が見られるが、一方でマックス・シェーラー的な共感や「一体感」の諸形態を提示しているのは興味深い。シェーラーは、ハイデガーとともに現代の現象学の基礎を築いたと同時に、その思想はキリスト教の倫理や教義の近代的解釈に基づく部分も多い。アズラムのような作家が、このような西洋近代思想をうまくずらし、現代の多元化する局面の表象に用いているのは特筆に値する。

(2) 成果の国内外における位置づけ

投稿中・執筆中の論考もあり、それを含めてもまだ充分ではないが、成果を国内外で発表している。海外では、大きな学会での発表こそ少なかったものの、研究の進展ごとに発表できている。国内では発表が少ないものの、現時点で投稿中の原稿もある。

2014 年、モーシン・ハミッドの『気の進まぬ原理主義者』論を『Albion』誌に発表した。これは依頼原稿であった。

2014 年 3 月に Trauma: Theory and Practice の大会で発表したカーミラ・シャムシーの『焦げ付いた影』論を、大幅な改稿を加え、2014 年度中に同学会が主催する分担執筆の論文集（英国 Inter-Disciplinary 社）

に投稿した。再審査のうえ掲載が決定し、2015年には掲載ページ数も確定しているが、出版社の都合で出版が遅れている。ほどなく出版されるものと考えている。

また、これを踏まえたシャムシー論を含む論考を、2017年4月に論文集『イギリス小説の「今」――記憶と歴史』（仮題、河内恵子ほか、彩流社）に投稿している。こちらは2017年度中に出版の予定である。

H. M. ナクヴィの『ホーム・ボーイ』およびモーシン・ハミッドの『気の進まぬ原理主義者』について、Fear, Horror, Terror（2015年9月、英国オックスフォード大学マンスフィールド・コレッジ）で研究発表した。この発表原稿に加筆・修正を施して提出し、再審査のうえ論文集*No Escape*に収録されることとなった。出版は2016年。

ナディーム・アズラムの『叶えられぬ祈り』について、Trauma: Theory and Practice（2016年3月、ハンガリー、ブダペスト・ヒルトン）で研究発表した。この発表原稿に大幅な加筆・修正を施して同学会に提出し、再審査のうえ論文集に収録されることとなった。同学会では前回の論文集も出版が遅れているため、現時点では出版時期がどうなるかはわからない。原稿を取り下げ、他所への投稿も視野に入れている。

ナディーム・アズラムの『盲目の男の庭』について ACLALS（イギリス連邦言語文学会）の大会（2016年7月、南アフリカ共和国ステレンボッシュ大学）にて発表した。現時点では、この原稿を加筆・修正して投稿準備をしている最中である。

なお、これらに加えて、この研究を続ける過程で、この研究自体にはさほど重要性はないものの、関連した発表を3回おこなった。2014年7月には What Happens Now?第3回大会（英国、リンカーン大学）において研究発表をし、2015年および2016年の日本英文学会のシンポジウムで講師を務めた。これらの発表はいずれもパキスタン系作家についてのものではないが、9.11同時多発テロ表象の研究から、世界的内戦表象へと研究テーマを広げるきっかけとなった研究である。

(3) 今後の展望

今後は、以下に述べる三点の研究活動を中心に行いたい。

まず、これまでの研究成果をもっと公表し、まとまったかたちにする。既に投稿したものに加え、準備中の論文を発表する。

次に、今回の研究をより発展させたかたちで次の研究プロジェクト「現代イギリス小説における世界的内戦表象」（基盤研究(C)、課題番号17K02524）につなげていく。この研究では、「イギリス文学」をより広義に定義して、より多様な作家の傾向を探るとともに、9.11同時多発テロを端緒にして可視化されてきた世界的内戦状態への不安の表象を研究し、その成果を公表していく。

これに加え、今回のプロジェクトと次回のプロジェクトを合わせ、より広く目にとまるようなかたちで研究成果を公表したい。現時点では目処が立っていないが、彩流社の論文集が目にとまるようなことがあれば、日本でも研究を公表する場が増えるかもしれないので、そういった場を活かせるよう、今後とも積極的に研究公表をする。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1件）

(1) 板倉厳一郎、「イェニツェリ兵の抵抗――モーシン・ハミッド『不本意な原理主義者』を読む」、『Albion』、査読無、Vol. 60、2014年、pp. 23-36

〔学会発表〕（計　6件）

(1) Gen'ichiro Itakura, "Screaming Horses and a Leopard Cub: Violence and Ethics in Nadeem Aslam's *The Blind Man's Garden*", ACLALS 2016, 2016年7月15日（査読有）、南アフリカ共和国ステレンボッシュ大学

(2) Gen'ichiro Itakura, "The Remains of the Buddha: Representation of Trauma in Nadeem Aslam's *The Wasted Vigil*", Trauma 6, 2016年3月12日（査読有）、ハンガリー、ヒルトン・ブダペスト

(3) Gen'ichiro Itakura, "Fear of 'Brown Men' after 9/11: H. M. Naqvi's *Home Boy* and Mohsin Hamid's *The Reluctant Fundamentalist*", Fear, Horror, Terror 9, 2015年9月4日（査読有）、英国オックスフォード大学マンスフィールド・コレッジ

他3件

〔図書〕（計　2件）

(1) Elspeth McInness, Danielle Schaub, Gen'ichiro Itakura et al. (12人中4番目), *Re-Presenting Traumas, Uncovering Recoveries*, Inter-Disciplinary Press, 印刷中, pp. 46-64, 総ページ数連絡なし

(2) Dean Caivano, Gen'ichiro Itakura et al. (13人中12番目), *No Escape: Excavating the Multidimensional Phenomenon of Fear*, Inter-Disciplinary Press, 2016, pp. 73-82, 総ページ数92ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

板倉　厳一郎（ITAKURA, Gen'ichiro）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：２０３４０１７７